

**「ぶんぶんひろば」における授業の実践  
「保育内容（造形表現）」  
（学芸学部 子ども学科）**

●授業の概要と目的

本学学芸学部における「保育内容・造形表現」は幼稚園教諭一種免許状もしくは保育士資格取得のための選択必修科目で、主に学芸学部子ども学科の2年生が履修する。子ども学科の学生の多くは2年生の秋に初めての實習である幼稚園實習を経験する。本授業は實習を目前とした2年前期に開講される科目であり、「造形活動を通じた乳幼児理解」をその修学目標のひとつに掲げている。そのため、毎年授業計画の中に「乳幼児および保護者と関わる実践」を取り入れている。その実践内容として、子ども・子育て支援研究センターでの「造形あそび」と、近隣の幼児教育施設「ぶれいすくーる・ちゅーりっぷ」の協力を得て行う「造形まつり」が挙げられる。

2013年度のこの科目の履修者はグループA26名（男子9名女子17名）、グループB22名（男子5名、女子17名）の計48名であった。そのうち、3名が学期途中で大学を退学し、5名は授業への出席状況に著しい問題があり、単位取得を断念した結果、計8名が実践へ不参加となった。この8名を除く40名が子ども達と関わる実践を行った。本年度は時間割の関係で、GA20名（男子3名、女子17名）が子ども・子育て支援研究センターの子ども達（0～3歳）および保護者と活動を行い、GB20名（男子7名、女子13名）がぶれいすくーる・ちゅーりっぷの子ども達（3～6歳）と活動を行った。子ども・子育て支援研究センターの利用者との活動は2014年7月17日（木）に行った。

●活動内容

子ども・子育て支援研究センターの「ぶんぶんひろば」は主に幼稚園入園前の0～3歳の保護者と乳幼児が利用している。活動内容はその年齢に合わせたものを行う。おおむね1歳3ヶ月～2歳未満の発達として、「歩き始め、手を使い、言葉を話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に自発的に働きかけていく。歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新し

い行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める。その中で、物をやり取りしたり、取り合ったりする姿が見られるとともに、玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物との関わりが強くなる。」ということが挙げられる。

2014年度は学生が4つのグループに分かれ、上記の子どもの発達の姿を考慮し、活動案を作成、準備をした上で実践を行った。4つの活動は以下の通りである。

べたべたシール貼り ★台紙を作成する。 ★さまざまな色や大きさの丸いシールを子どもに貼ってもらう。	こむぎこねんど ★こむぎこねんどをつくっておく ★感触あそび・ごっこあそび
てがたべったん ★手型を写す台紙を作成する。 ★子どもに好きな色を選んでもらい、手型を写し取る。	お絵かき・工作 ★折り紙でおにぎりをつくる（三角折りのかんたんなおりがみ） ★ぼんぼんお絵かき（たんぼ筆）

●学生の反応～ふりかえりプリントより～

気づき

- ・子どもが粘土をひたすらこねたり、のばしたりしていたのが印象的であった。（女子学生, K. S）
- ・今までボランティアで関わってきた積極的な子ども達とは違い、保育所・幼稚園にまだ通っていない子ども達ということもあってか、多少内向的だったように感じた。（女子学生, N. I）
- ・お母さんも感触あそびに夢中になっていた。（女子学生, K. A）

反省（今後に向けて）

- ・手に絵の具をつけることに抵抗を持つ子どものために、まずは保育者が手に絵の具をつけて子どもに見せてみるなど、子ども達が安心感を得られるような工夫が必要であると思った。（女子学生, C. T）
- ・内向的な子ども達との上手な関わり方がわからず、子ども達に不安をあたえてしまったかなと思う。あらゆるタイプの子どもの達と上手く関わられるようになりたいと感じた。（女子学生, N. I）

・「まだやりたい」と言ってくれる子どもがいたが、次の子どもに順番を回さなくてはいけなかった。しかし、親の目を気にして「もうやめようね、お家でできるよ。」と言えなかった。今後は子どもに伝えなくてはならないことはしっかり伝えたい。(女子学生, K. A)

### 感想

- ・ボランティアやこどもまつりとは違い、造形活動を幼い子ども達を共に行う経験ができて、これから始まる実習への良い準備となった。泣いてしまった子どもも何人かいたが、最後には手型を保護者の方に渡せて良かった。(女子学生, C. T)
- ・今回初めて親の前で子どもと関わった。親子と関わることに緊張したが、これからその関わり方を学んでいきたい。(女子学生, K. A)
- ・思ったよりもたくさんの親子が来て、良い雰囲気での活動ができた。保護者の方にも楽しんでいただけて嬉しかった。(女子学生, K. S)

### ●まとめ

学生たちの多くは、乳幼児と関わる経験が極めて少なく、0～3歳の子どもの「できる・できない」を理解していない。実際に子どもや保護者と活動を共にすることで、実感的に子ども理解を深めることができる。実習に行く前に子ども達と関わる活動は不可欠であると考え。学生たちの自覚を促し、実習に向かわせる意味でも、今後も積極的に取り入れていきたい活動である。また、「家ではできないから嬉しい」という保護者の声が多い。近年、家庭でお絵かきやえのぐあそびなどの造形活動を行う保護者が減少している印象を受ける。家庭での造形活動の導入になるようなしなやかを作っていくことが、今後の課題である。



写真1：小麦粉粘土で遊ぶ女兒と保護者、サポートをする学生。



写真2：小麦粉粘土で遊ぶ女兒と保護者、サポートをする学生。



写真3：シール貼りをする女兒。「お姫様」の台紙は学生が制作したもの。



写真4：ぼんぼんお絵かきを楽しむ男児。



写真5：てがた・ぼん！保護者に人気のコーナー

(文責：学芸学部 子ども学科 小笠原 文)